

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 76



2012.4

アングル

「マチからムラの時代に」 『九州のムラ』 編集長／養父 信夫 …… 1

特集

『地域資源を活かしたイベントづくり』

蘇れ喜左衛門狸の神通力 東予市／徳田 紀男 …… 2
 かつばの町おこし 明浜町／横山 博文 …… 4
 「お接待の心」とともに… 内海村／小島 光義 …… 6
 ご案内します ようこそ河辺村へ 河辺村／谷本 寿幸 …… 8
 ことばで街の活性化 松山市／山内 敏功 ……10

論談一まちづくり

地域資源活用とビジョンなき地域イベントは根無し草の単なるばか騒ぎ
 (株)タップクリエート代表／二瓶 長記 ……12

キラリ光るまち

日本童話祭 大分県玖珠町 社会教育指導員／梅木 金治 ……14

引き算型まちづくりの事始め(七)

内子町／岡田 文淑 ……16

トークナウ

遊子学～東京からの思い～ 藤田 圭子 ……18

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩キ目デス&足ラテス

愛媛は優れた近代橋梁の宝庫「コンクリート・アーチ橋」 岡崎 直司 ……20

媛のかわら版

キャンペーンおばさん(その3) 松野町／隅田 深雪 ……22

平成14年度地域づくりリーダー育成研修会報告 ……24

研究員レポート

九州の町を訪ねて 奥山 清司 ……26

information センターからのお知らせ ……29

特集

「地域資源を活かした

イベントづくり」

あなたのまちの地域資源は何ですかと訪ねられたら、大半の人はこう答えるのではないだろうか。

「私の地域は山と海しかありません。他に何もありませんよ。」と。

はたして本当に何もないのだろうか。否、何もない地域なんて存在しない。ないのではなく、気付いていないだけである。そこになるもの全てが資源であり、財産なのである。

形のあるものが資源とは限らない。目に見えないものが資源となる場合もある。

今一度、自分の地域を足元から見つめなおして考えてみてはどうだろうか。

(池田)

表紙の言葉

松山城は四百一年めの春を迎えた。日本に残る城の中でも、大変美しい姿を見せている。

祖父が戦災で燃え上がる松山城の火を消しに参加した事も、歴史の中の一つであろう。

外から松山に入る際、空からも、海からも松山城が見える。JR線からの松山城には、幼い頃からの想い出が走る。松山城が見え始めると、いつも身支度を始め、松山に入る心の準備をしていたものです。

柳原 あや子



「マチからムラの時代に」

『九州のムラ』
編集長 養父 信夫



「ムラ」には、マチではなかなか感じることのできなくなってしまう「風」が吹いている。地域固有の風土、風景、風習、風俗、風格、風味、風情といった「風」である。マチの人々は「風」を求め、ムラを訪れ、「見る、食べる、遊ぶ」といった従来の物見遊山的な観光から、「作る、語る、学ぶ」といった新たな観光（「ツーリズム」）へと、より地域の「風」を感じる旅を求め始めている。

「九州のムラ」には毎号多くの声が寄せられるが、その中でマチの人々の声を拾ってみる。

五十〜六十代の人々は「定年後は自然豊かなところで農業をやって暮らしたい」といっ

た「定年帰農」、または「いきなり農林業は大変だけど」ちよつとした菜園付きの家に移り住んで田舎暮らしの雰囲気味わいたい」といった「農的生活」へ憧れ、自然の中の「癒し」を求めてムラを巡る。三十〜四十代は「わが子を自然の中で思いきり遊ばせたい」と自分が子供のころに体験したものを子供たちに伝えたいとムラを訪れる。

二十〜三十代の若いお母さん達の中には「子供たちに『安全な食』を食べさせたい」と農産物直売所を週末ごとに訪れる人も増えている。「となり

のトトロ」を見て育った十〜二十代の若い人の中には「ムラってとても素敵ですね」「廃校にぜひ行ってみたい」と、彼らにとつて異文化であるムラに触れることを楽しむ若者も多くなっている。今や世代を越えて

ムラを求める時代になったのである。

マチ側が、よりバーチャル（仮想現実）にグローバルに、そしてIT・デジタル化していく社会を盲進するほどに、その反動として自然に囲まれ、自然と共生する農林漁業の暮らしが息づく、よりローカルなムラを人々は求めるものかもしれない。

ぜひマチの人々の思いを受け止め、彼らと交流を行って欲しい。心の通つた良い交流。それはムラにとつても、マチにとつても必ずや生きる活力を与えてくれるはずである。

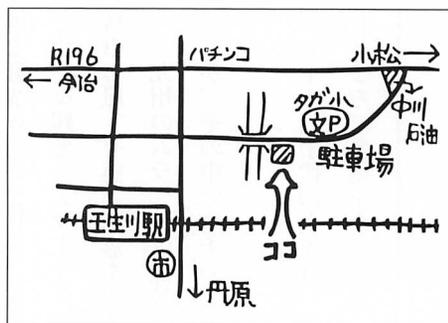


蘇れ喜左衛門狸の神通力



東予市
喜左衛門狸の会

代表 徳田 紀男

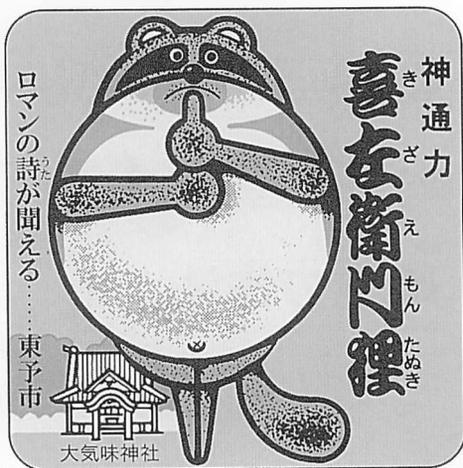


何故私たちのグループがと思われるかも知れませんが、この運動の始まる十年前はバブルがはじけた時だったと思います。しかし東予地方は、松山自動車道と、しまなみ海道接続の高規格道の工事が始まっておりました。

この現状を見ていて、何かアクションを起こさなければこの地方はただの通過点にしかならないと思い、当地方には、昔民話で遠くは京阪神まで名の馳せた、四国狸番付西の横綱の喜左衛門狸が大気味神社の社に眠っていたのを「『きざゝ』」

何時迄寝ているんだ」と、たたき起こし、「東予地方の大事な状態を見ろ！このままだとこの町は無くなるぞ！早く目を覚まし、お前の神通力でこの町を助けてくれ。その代償として、おまえの好きな踊りや、そのテーマソング、狸顔より美しいキャラクターを作りみんなに集って頂きおまつりをしてやるから、助けてくれ！」の思いが事の始めでした。最初にキャラクターの公募、テーマソング、踊り、グッズと、出来上がってまいりました。

因みに昨年第七回「喜左衛門まつり」は、がまの油、チンドンヤ、お神楽と祭りメインイベントの仮装大賞大会、また司会もテレビでおなじみの方と境内では、



テーマソングによる狸踊り、郷土芸能のトンカカさん踊り、又無料配布の綿菓子、飲物、弁当、くじと、所狭しと販売店も出来ております。

内でも仮装した元お嬢さん等は、特にセミプロカメラマンの餌食となり、嫌がるかと思えばポーズを取ったりして、明日からの事も考えずキャッキヤツと楽しんでる姿は、見ている方が恥ずかしくなったりしています。この祭りの基本は、昔縁日において催していたものを出来る限り集めたいと思っておりますが、残念なことには浪曲、漫談、バナナの叩き売りを素人の方々に伝承されていないため、見つけることが出来ていません。唯この祭りは、私たちの最終目標である百万人

観光客誘致の起爆剤としての催し物であることに変わりはありません。
 今、全国民の批判の矢面になっている三本の橋を考えて下さい。国民の血税を使いしかも今後共利益が上がらなく永久的に血税による供用となることです。この三架橋共、本州からの願望より四国側の強力な要求による橋であったはずです。今その望みをかなえてくれたことは、玉はこちらへ投げられたのです。それは、四国の住民が都会地へ買い物等に流出のために要求したことではなく、離島による本州からの流入の妨げになることの解消だと私は認識しております。投げられた玉は磨かなければ錆びていずれば無くなってしまう、磨けば永遠に光輝くのです。



きざえもん祭（仮装大会）

と認識して行動すべきだと思います。又今、喜左衛門狸は市民権を得たように見えますがそれはほとんどマスメディアの方々の身に余る援助があつてのことは会員一同感謝しております。唯ここに来て会員の中にもこれだけ一生懸命しているのに行政の方々は無反応（マスコミ報告は別として）。自分の街をどこへ持って行くか夢がありません。
 今ひと口にまちづくりと言ったものの大変さを十分味わっているのが本音です。どうかこの紙面をお借りして玉は四国に投げられて誰も助けてくれません。磨くのは我々一人一人が努力して行くしかないことを思うと、喜左衛門狸の神通力で少しでもまちに喝を入れてくれることを祈願しているのが現状です。

その玉とは、この東予地方を含む四国地方の手のつけられていない自然が残ってる素材、特に東予地方は県下では屈指の遠浅海岸や西山興隆寺、歴史の永納山、世田山、小松、西条の石鎚山と農産物の宝庫として自信を持つる地区であることを住民や行政の方々もつ

追伸

二〇〇四年十月三十日（土）、三十一日（日）には東予市において最後の行事だと思えます。日本狸学会を開催する予定です。出来るならば四国狸番付の番付会議も考えております。県内の狸で上位に上がりたい狸は、特にこの一年頑張ってください。

西の巣					東の穴				
同	同	前	小	関	横	大	張	関	小
				張		張	開	張	前
				出		出	脇	脇	頭
				大		大	と	あ	さ
				網		網	さ	ぬ	ぬ
				頭		あ	ぬ	き	き
あ	さ	あ	い	と	あ	さ	い	と	あ
ぬ	ぬ	よ	さ	よ	ぬ	ぬ	よ	さ	ぬ
わ	き	わ	よ	わ	わ	き	よ	わ	わ
伊	屋	佐	松	高	小	高	新	高	川
				荏	松	居	知	島	島
				川	島	松	島	慶	徳
				田	金	浄	小	七	丸
				田		願	女	九	丸
				喜		寺	衛	衛	五
				左		長	郎	利	八
				衛		禿	郎	八	郎
				門					重

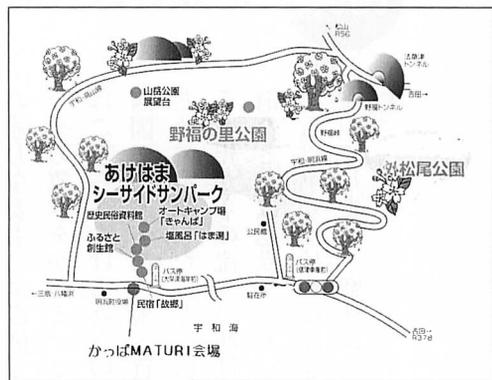
蒙御免 四国狸大番付

かっぱの町おこし



明浜町
明浜町企画調整課

横山 博文



町の元気をつくらう

明浜町の町づくりイベント「かっぱMATURIサマーin明浜」も今年で十六回を迎えることとなります。

当時、明浜町は国道も鉄道も通ってなく名前もほとんど知られていませんでした。

何とか、「明浜町」という名前を広く知ってもらいたい町の元気をつくりたいという思いから、町の中央に位置する石灰鉱山跡地とその前にある海水浴場を利用して「町づくりイベント」を実施しようということになりました。

役場職員や各団体から参加してもらって「シンボル事業企画会」を設置して、明浜町の自然と海山の幸、温かい人情をベースとしたイベントづくりと、それをアピールするためのキャラクターとして、町に伝わる河童の恩伝説の「河童」に登場してもらったことになりました。「かっぱMATURI」の誕生です。

かっぱの国の夏祭り

第一回目の「かっぱMATURI」は、かっぱ誕生から始まりました。

大きな卵から河童が誕生し「MATURI」がスタートしました。二回目は「か

っぱの結婚式」、三回目は「かっぱの子供の誕生」と続きました。

かっぱMATURIは、オープニングから始まり、かっぱ横丁、虹のなぎさ焼、ビーチバレー大会、ボール投げ、タライ競争、創生館での体験教室、ミニシアター、ナイトステージ、花火大会と盛りだくさんの行事で一日を楽しめますが、強く明浜町をアピールしていくための強烈で個性的な行事を創れていないのが悩みの一つです。





シーサイド・サンパークと かっぱMATURI

明浜町では、「かっぱMATURI」の始まった翌年の平成元年から「かっぱMATURI」の会場である大早津を町づくり交流拠点として整備に着手しました。交流拠点は「シーサイド・サンパーク」として、民宿故郷の町営化、ふるさ

と創生館、歴史民族資料館、オートキャンプ場「きゃんぱ」、塩風呂「はま湯」、大早津海水浴場の整備と進めて平成十三年度に事業が完成するまで、かっぱMATURIとシーサイド・サンパークは二人三脚で歴史を積み重ねてきました。その度に、かっぱMATURIは会場の設定や行事の内容を変え町のアピールと町民の元気づくりに努めております。

今では、近隣の町はもちろん、松山でもかっぱMATURIの名前は知られてきており、シーサイド・サンパークとともに明浜町の顔として、さらに充実したものにしていかなければなりません。

住民の手づくりイベントに

かっぱMATURIは、どちらかというと行政主導で進めており、イベントの企画を話し合うシンボル事業企画会にJA、漁協、商工会から参加をしてもらってはおりますが、事務局は役場がしており、今後、できれば住民の自由な発想や取組みの中から住民の手づくりイベントとして発展させていければと願っています。

「真夏の夢海岸」をテーマに開催されている「かっぱMATURI」。

一年ずつ歴史を重ね定着してきており

ますが、行事の固定化、惰性化も反省材料の一つになってきています。「かっぱMATURI」の「かっぱ」へのこだわりも課題となっています。年とともにイベント運営の経験は積み重なり、行事の段取りはよくなってきましたが、それだけに新しい何かへのチャレンジが少なくなっているような気がします。

十六年目を迎える今、町の歴史の大きな転換期を迎えている今、「かっぱMATURI」も新しい時代への大きな転換の時を迎えているかもしれません。

かっぱMATURIの実施について、もう一度初心に帰り、みんなで考えていければと思います。

今年は、どんな河童が誕生するのか。河童の国がどのように変わっていくのか楽しみです。

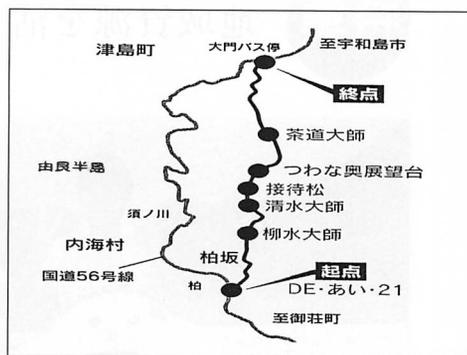
今を大きなチャンスとして、夢を創っていくための取り組みをスタートしなければなりません。

「お接待の心」とともに…



内海村
柏を育てる会

小島 光義



柏坂旧へんろ路

『海』…私は突然驚喜した。見よ右手の足元近く白銀の海が展けてゐる。まるで奇跡のやうだ。木立深い山を潜って汗臭くなった心が、此処に来て一飛びに飛んだら飛び込めさうな海の陥し奔を見る。驚喜は不安となり、不安は讃嘆となり讃嘆は忘我となる。暫しは風に吹かれ乍ら茫然として佇立。」

これは大正時代娘遍路で名を馳せた高群逸枝の「娘巡礼記」の一節で、逆打ちで四国巡礼をした高群が、津島から柏坂にさしかかった時のことを記したものです。

柏坂旧へんろ路は、江戸時代に澄禅が記した「四国遍路日記」や真念が記した「四国遍路道指南」にも出てくるなど、古くから津島郷と御荘郷を結ぶ主要街道でした。かの野口雨情が「松の並木のあの柏坂幾度涙で越えたやら」と詠ったほど急な坂道で交通の難所でした。しかし江戸時代の俳人大淀三千風は「柏坂の峯渡り日本無双の遠景なり」と、高群逸枝と同様に柏坂の眺望のすばらしさを讃えています。遠くに霞む九州、龍が天に昇るかのような由良半島は実に絶景です。昭和五年には宇和島に本社があった南予時事新聞が読者投票で選んだ南予十八景に

柏坂は選ばれています。

この柏坂は戦後間もない頃までは地域の生活道として利用され、津島町の畑地地区や上槇地区と頻繁に行き来がありました。しかし海岸部を通る国道の整備や自動車の発達につれ柏坂を通行する人は減り、道は次第に荒廃して獣道と化していました。

柏を育てる会

昭和五十九年、農山漁村における生活環境問題の解決活動を推進する農山漁村地域生活環境改善対策事業のモデル地区として、内海村柏地区が指定され、御荘農業改良普及所の指導の下、「柏を育てる会」が結成されました。

「柏を育てる会」ではまず、むらづくり意向調査を実施し柏地区の生活環境の現状と問題点を洗い出し到達目標を定めました。そして生活改善の申合せや村づくり標語の募集、昔踊りの復活、ふるさと市・どんど焼きの実施など、子供から老年寄りまで三世代の知恵と技を出し合っ村づくりを進めてきました。

特に地域のシンボルづくりに住民総出の共同作業で取り組むこととして、獣道と化していた柏坂旧へんろ路の復活を目指しました。昭和六十年四月二十八日の

第一回のへんろ路づくりでは中学生を含む九十人の地区住民が集まり、下刈り作業に従事しました。また、柏坂中腹の「柳水大師」の大師堂の建築や、休憩所・トイレの設置、桜の植樹などへんろ路の環境美化に努めてきました。以来毎年春秋の二回、柏坂へんろ路の下刈り作業を実施しています。その効果か年々柏坂を歩くお遍路さんの姿が数多く見受けられ、うれしい限りです。

トレッキング・ザ・空海

平成六年十月九日、「柏を育てる会」発足十周年を記念して、毎年整備活動をしているへんろ路を利用したイベント「へんろ路ウォーク大会」を実施しました。柏坂の景色を多くの方々に見てもらい、楽しんでいただくと、お楽しみクイズの実施など企画を凝らしました。結果、総勢二百三十二名の参加者を得て盛大に開催されました。しかし、イベントの大きさがえって負担となり、翌年から実施することが出来ませんでした。

ところが平成十年に内海村が分村五十周年の記念事業として、柏を育てる会や柏地区自治会、商工会、婦人会などとともに名も「トレッキング・ザ・空海」と改めて実施しました。へんろ路各所に接待

所を設け、ここでは杖や麦茶、饅頭などをふるまう「お接待」をして参加者に楽しんでもらいました。

また、本村家串地区出身の俳人夏井いつきさんを巻き込んで柏坂へんろ路を詠う句会ライブを実施しました。総勢三百二十人の参加者で盛会のうちに開催されました。

今年度で「トレッキング・ザ・空海」も五回目を数えます。毎回約三百五十人の参加者を得て好評を博しています。前夜祭として「へんろ路講演会」を実施するなど企画を増やし、内海村におけるイベントとして定着しています。また四国へんろ路世界遺産化の動きの中で対外的にも注目を集めるようになってきました。

このイベントのキーワードは「お接待の心」です。柏地区の人々は昔からへんろ路の各所でお遍路さんにお接待をしていたと伝えられています。昔ながらの「お接待の心」つまり「人を迎える優しさ」を守り、これを基本にすることでより良い「むらづくり」を目指しています。

おわりに

平成十六年十月一日に内海村はなくなり愛南町になります。愛南町になっても「柏を育てる会」の活動は「お接待の心」



とともに続いていくでしょう。また「トレッキング・ザ・空海」は四十番札所の観自在寺を中心に南は一本松・宿毛境の松尾坂から、北は内海・津島境の柏坂までと大きくグレードアップが図られることが期待されます。

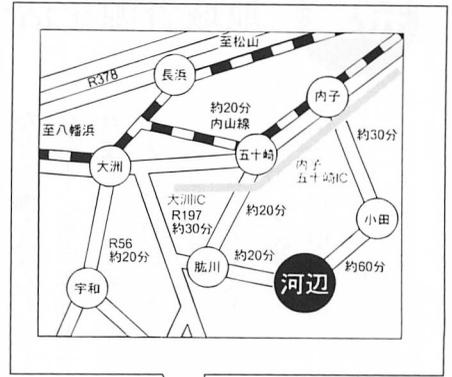
合併して行政区画が変わろうとも昔ながらの「お接待の心」を大切に後世の人々に伝えていくことが私たちの「むらづくり」であると思います。

ご案内します ようこそ河辺村へ



「坂本竜馬はどこを
見つけているのだろうか」

河辺村
河辺村役場 産業建設課
谷本 寿幸



小さいながらも楽しい我が村、そんな日はもうありえないのでしょうか。そんなことを言っている場合じゃない、すべてが時間に追われ、タイムスケジュールとの勝負そんな日々です。

新聞、テレビでは、毎日のように市町村の将来への動向が報じられています。世の中全体が時間の流れに押し潰され、自分を見失っている人が多いように感じます。自分にも当てはまります。

しばし、手を止めて、頭と心を休息してください！

目を閉じてください、「あつ」と心の目です、川の流れを想像してみてください。川の流れの向こうに橋が見えます。それ河辺村の浪漫八橋です。全国でも珍しい屋根付き橋なんです。

橋を見て歩きながら、お話ししましょうか。河辺村のこと少し知ってもらえますか。気の利かんガイドで申し訳ないですが。

1. 御幸の橋 (明16)

県民俗文化財 昭45指定

この橋の横にある銀杏の大木の葉が十一月に色付き散ると、辺り一面黄色い絨織を敷き詰めたようになります。

さて、河辺村には、「ふるさとの宿」があります。昭和六十二年度に出来まし

た。廃校から生まれ変わった宿泊施設は、いろんな人が訪れ、出会いの場として思いつきり第二の人生を働いています。不思議なものです、計画時には、「宿を作つて誰が泊まりに来てくれるんぜ」と言われ、危惧の声が相当なものでしたが、宿のきじなべは、旨くて身体が温もりまっせ。

2. 帯江橋 (昭27)

三嶋橋 (大12)

農機具が置いてあり、ベンチがある帯江橋、時に車も通るのが三嶋橋です。重みに耐え根性の座つた橋です。

昭和六十三年十一月に脱藩のルートが郷土史家の手により解明されました。その時の心境は、宝くじが当たったかと思うぐらい、いやそれ以上です。あの幕末の志士坂本龍馬が河辺村を通っていたなんて。すぐに、坂本龍馬脱藩の道保存会が作られ保存に精が注がれました。当時の道が復元され、平成元年九月から「わらじで歩こう坂本龍馬脱藩の道」のイベントが開催され、今年も、第十五回という節目の開催になり関係者の意気込みも高まっています。村内十五kmの道を歩きながら歴史を感じ、踏破にチャレンジしてみませんか。お待ちしております。

4. 豊年橋 (昭26)

この橋は、小川に民家の方が架けられ、自家用橋として利用されています。端には薪が詰んであり、生活感にあふれたミニ屋根付き橋です。

5. ふれあい橋 (平4)

存在感のある橋です。ふるさと公園とふるさとの宿をつないでいます。盆には、都会から帰省した懐かしい人との交流がふるさと公園であります。まさしくふれあいの地です。ここで打ち上げられる花火は、余りに近くて体に振動が伝わります。

また、龍馬を含む脱藩の志士三人の像「飛翔の像」があります。日本の再生を

願うごとく「キラリ」と見つめています。

6. 秋滝橋 (平9)

7. 龍王橋 (平9)

「わらじで歩こう坂本龍馬脱藩の道」のイベントの時に渡る橋になっています。新しい橋ですが、かなりの人が通っています。

8. 龍神橋 (平2)

壮麗な三杯谷の滝を目の当たりに見られるよう架けられた橋です。名の通り龍にまつわる石があります。サッカーボール大の石ですが、どんな大水が出ても流されない、根がある石です。龍が大岩を磨いて残したものだと言われています。

さて、八つの橋を訪ねました。疲れたことと思います。ふるさとの宿でゆっくり風呂に入りながら疲れた身体を癒してください。

河辺村の現在は、様々な縁で結ばれた方々のひたむきな取り組みの上に成り立っていることを改めて感じています。

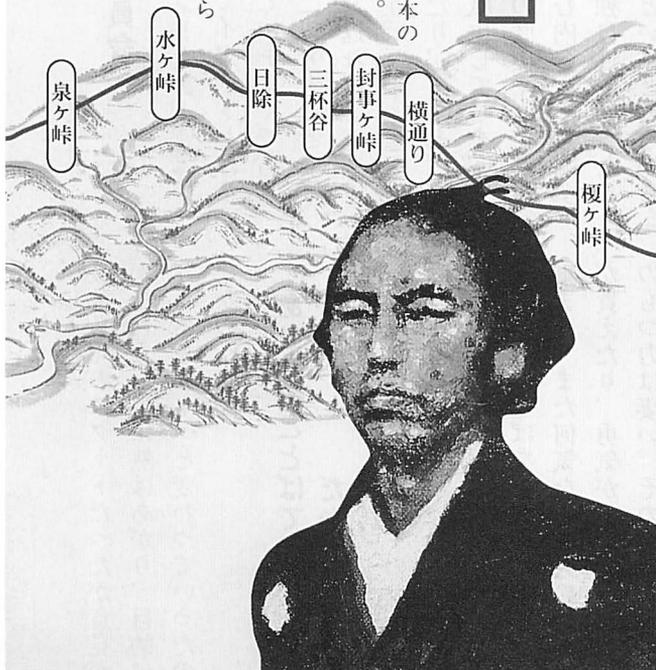
龍馬は脱藩して大きくなったが、河辺村は、龍馬とともに今後も大きい精神で生きていく、その決意を心に繰り返し吐きます。

どうぞ、河辺村にぶらっと来てくださいます。千三百人余りの村民が歓迎を致します。

伊予の国 河辺村

坂本龍馬脱藩の道

榎ヶ峠から泉ヶ峠。果たすべき熱い使命、現代日本の誕生に夢をかけた、坂本龍馬。大望のため、脱藩という大罪を犯し、ふるさと土佐を捨てた龍馬が選んだ未来への道。日本の曙は、まさに、ここから始まった。

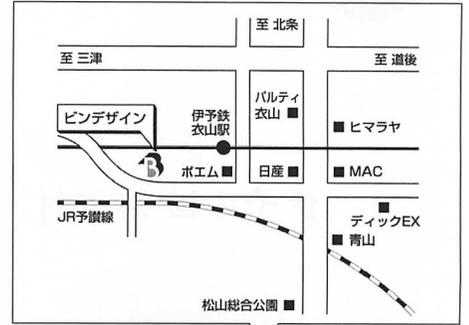


ことばで街の活性化



松山市
21世紀委員会

委員長 山内 敏功



新しいタイプの委員会

第六回ふるさとイベント大賞「優秀賞」を頂いた。「ことば」でイベントとは？なかなかイメージしにくいテーマであり説明に苦労する。説明に苦労すると予算取りにも苦労する、ふり返ればよくも予算がついたもんだと思う。

モニュメントを建てたり、打ち上げ花火で終わり開催後すぐ風化してしまうイベントではなく、松山の歴史や文化が背景にあり、子供達を育む内容、そして全国どこもやっていない独自性を持ったイベントに仕立てよう、というところから始まった。

委員会のメンバー選びは大事だと思う、当たり前のことだが会議は言葉で進行する、だから即、言葉からイメージを想起できる能力、独自性をもったアイデア力、多くの経験と見識力そしてなによりもアイデアを具現化するための行動力が必要であり、委員の大半は創造性を生業としている職種から選んだ。ちなみに俳句、音楽、デザインの業界、また冒険家の故河野兵市も委員の一人に加わって貰い、今まで市にはなかった委員会が結成され、委員会ルールも「反対意見を出す場合は代案を用意する」など初回から

波乱必死のスタートだったが意見がぶつかり合うたびに熱はあがり、目的にむかうエネルギーへと変わっていったのではなからうか。

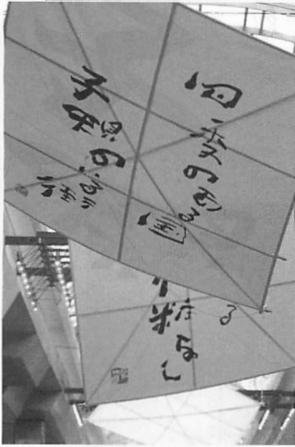
あなたのことばで元気になれる

だから言葉大募集

「ことばはアイデアのシンボルである」と言われるくらいアイデアはことばから生まれる。

だからことばを集めればアイデアも集まり、また何気ない友人の言葉で元気が貰えたり、勇気がわいたり、ことばのもつ力は凄い。その凄いちからをもつことば、コミュニケーションの基本となることばが、この頃疲弊してきたように思う。そこでことばのリノベートという意味からも「ことば」をテーマに取り上げた。幸い松山は俳聖子規さんを育んだ街であり、ことばに対する「場のちから」「街のちから」「人のちから」があり、松山らしい独自の発信ができる環境があることから、ことばを軸に展開することとなった。

「あなたのことばで元気になれる、だからことば大募集」は三十文字以内のことばを全国から募集、北海道から九州、子供からお年寄りまで一万二千一のこと



片岡鶴太郎氏によることば凧

ばが集まった、つまりアイデアが集まったということになる。今も市役所ロビーに吊されている「恋し、結婚し、母になったこの街でおばあちゃんになりたい」をはじめ、元気がでる多くのことばがあり、発表イベントでは市役所ロビーを劇場化し、受賞したことばが即興でジャズ演奏されたり、即興で誰でも出来る俳句大会と、新年早々市役所が劇場化された例は全国の行政機関で聞いたことがない。

またその夏はことば達が片岡鶴太郎氏の書によって大街道、銀天街、市駅地下街の宙を舞うことばのビジュアルとなり、そのことばの下で「ことば」を生業とする大道芸人達のパフォーマンス、全国から参加した高校生達による俳句甲子園の予選など、まさにことばづくりのイベントになった。

この頃になってやっと関係者達に「ことばで活性化」の意味がわかり始めた時期だったのではなからうか。



俳句甲子園 決勝

そのセオリーどおり組み合わせさせた企画が夏井いつき氏主宰の「俳句甲子園」だったから驚いた。日本の文学に日本の武道の戦い方、審

アイデアのリノベート

俳句甲子園は第一回〜第三回まで松山青年会議所が松山大学を会場として主催してきた。それを開催場所をかえ、演出をかえて「ことばのちから」に参加してもらうかたちとなった。

新しいなにかを企てようとする場合、まずアイデアを探すつもりが、かたちを探し、かたちをまねる、だから全国どこも同じようなイベントが多くなる。何もない中からいきなり斬新なアイデアは生まれない、「既存の要素（従来やってきたこと）の新しい組み合わせ、それがアイデアとなる」と僕がアイデアの正体を知らない頃、アイデアのつくりかたを学んだ一冊の本（ジェームス・W・ヤング著）にあり、まさに目からうろこだった。



ことばカルタへの展開

判の方法を取り入れ、多くの観客を楽しませる俳句の会は新しい俳句の見せ方であり、若い世代を巻き込み、俳句のすそ野をひろげる活動であり、まさにアイデアである。俳句甲子園が終わることなく、今後継続して松山の名物行事となり、参加した高校生のなかから、一人でも二人でも子規さんを凌ぐ俳人が生まれれば、これは凄いことだ。

三年間取り組んで思うことは、奇をてらい新しさのみを追うことではなく、松山をじっくりと見渡せば、歴史のなかにさまざまなものがたりを残していた人やモノがある、それらを発掘し、現代に組み合わせるアイデアこそ、まちづくりとなり、それに関わることが人づくりに繋がる。

まずはまちを活性化するきっかけづくりだけは「ことばのちから」を通じてできたのではなからうかとおもう。

地域資源活用とビジョンなき地域イベントは 根無し草の草なるばか騒ぎ

(株)タップクリエート代表

二瓶 長記



地域の個性づくりが地域活性化の決め手とまで言われて久しい。地域が主体となって地域資源を有効活用し、それを地域づくりに活かすことが重要であると誰しも叫んでいるが、残念ながら実態はなほだ心もとない。だいいち、地域資源をモノと思っている人も多い。ましてや、

他の地域に比べて優位性があり、個性的で特色のある資源を活用したいと考えているのは誰しもだが、全国すべての地域が特別な資源を有しているわけではない。これからは、自らの地域に存在するごく当たり前の資源、つまり「凡」の資源（身近な生物、田園、樹木、小川、地場産業、高齢者、女性など）を切り口を変えて工夫し新たな価値を見い出して有効活用したり、また、その資源の存在自体が厄介者、すなわち「負」の資源（豪雪、僻地集落、流木、湿地など）や、すでに無用のものとして棄ててしまった「棄」のもの（棚田、空家、竹や藁細工、炭、和紙など）を魅力ある地域資源として変ぼうさせることが求められている。

だが、「イベントは所詮一過性、地域住民が楽しめさえすればそれでいい」などと考えている学者も結構いる。筆者からすれば、そういう人間こそ、地域の実情やイベントの持つ有効性をまったく理解せず、汗も流したことの無い人間であると言わざるを得ない。

資源活用イベントの具体例をあげると、例えば「凡」の資源でもある水と「棄」の資源でもある和紙を組み合わせて見事なイベントを作り出し、総務省・財地域活性化センター共催の「ふるさとイベント大賞」にも輝いた高知県伊野町の「仁淀川紙のこいのぼり」などは出色である。これは「鯉のぼりは空を泳ぐもの」といった既存概念を打ち破り、町の中心部を流れる仁淀川に和紙で作った鯉のぼりを実際に泳がし、観光イベントとして注目を浴びているばかりか、仁淀川の環境保全と伝統産業の土佐和紙の復活にも大きく貢献している。また、「凡」の資源である群生竹を活用し、我が国唯一の竹づくしの音楽集団「バンブー・オーケストラ」を結成し、全国的に注目されている佐賀県東背振村の地域づくり集団「さざんか塾」の精力的な活動。豪雪といった「負」の地域資源を逆手にとって、僅か一〇〇〇人余りの小さな村が村民総出で



石川県白峰村の「雪だるまウィーク」
各家々の玄関前で家族の紹介もしている。

雪だるまづくりを発案し、今では三〇〇〇体がひしめく幻想的な雪だるまロードを造り観光客誘致はおろか、地域連帯の醸成と地域住民のモチベーションを高めている石川県白峰村。さらに、「棄」の資源でもある民話・伝説を掘り起こした山形県新庄市は、雪に埋もれた茅葺民家の囲炉裏端で茶を飲みながら昔話を聴く「新庄民話まつり」を催し、全国から多くの愛好者が訪れ、併せて市街地整備も「昔語りのきこえる道づくり事業」を進め、民話の里新庄のイメージアップを図っている。

このように、地域資源のソフト化による有効活用は計り知れない。特にこれからは、景観や森林、湖沼などの「空間資源」、ゆとりの心呼び起したり、高齢者の第二の人生活用といった「時間資源」、土地特有の人情やおもてなしなどの「サービス資源」、身近な例をあげれば、その昔、伊予、土佐の人々が旅人（地元では客人と書き、まろっどと呼んでいる）をねぎらった茶堂の風習なども、まさに固有のサービス資源である。さらに、伝統的な生活の知恵、技術、知識などの「知的資源」、新たな価値の創造などの「情報資源」、そして歴史や民俗文化などの「文化資源」など、皆貴重な地域資源で

あり、これらをもう一度掘り起こし、独創的な切り口からイベントを創造して地域活性化に結び付けていく必要がある。地域にはそんな魅力がまだまだ十分隠されているのである。

そこで、自分たちの地域に催されているイベントが、次のどの項目が欠けているかをもう一度検証して欲しい。

- ① 地域資源が掘り起こされているか。
- ② 地域の個性が表現されているか。
- ③ ソフト性がどれだけ高いか。
- ④ 独創的な切り口があるか。
- ⑤ 将来の発展性を感じられるか。
- ⑥ 住民が輝いているか。
- ⑦ 多数の住民参加があるか。
- ⑧ 人材が育成されているか。

以上の項目に欠けているものがあれば、いち早く是正に取り組むべしと言いたい。地域イベントづくりは、こんな厳しい時代なればこそ、地域活性化のための有力な手段としなければならぬのである。

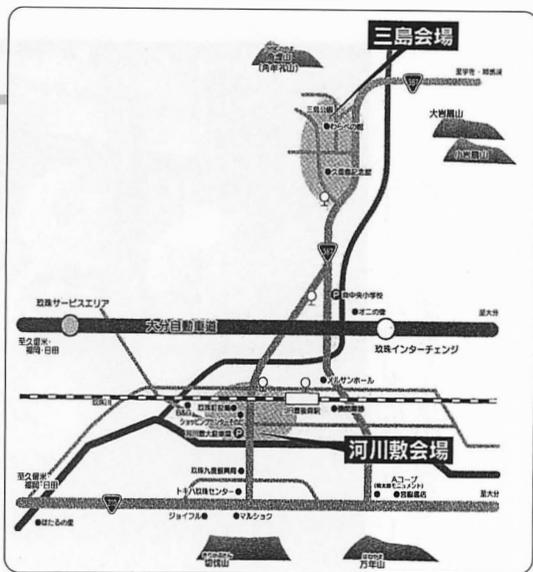
キラリ 光るまち

日本童話祭



玖珠町社会教育指導員

梅木 金治



日本童話祭パレード（三島会場にて）

子どもに夢をまいた人

「戦場では病気に冒され弾丸に撃たれましたが、神は幸い体をめぐんでくれました。そして『何か働け』と命じてくれました。それで、私は子どもたちのために命を捧げようと決心したのです。本を買うのは金がかかる。話なら石段でも、山でも、海辺でも。子どものおるところならいつでも出来ると考えました。」（昭和三十四年、日本童話祭のあいさつ）

玖珠町が生んだ口演童話家久留島武彦の口演童話行脚五十年を記念して、武

彦翁の愛弟子の九州童話連盟理事長 阿南哲朗氏・貴族院議員 村上巧児氏・当時森町町長 古井六郎氏ほかの人々によって、昭和二十五年五月五日（除幕式）三島公園（森地区）に童話碑を建立したことから始まりました。

夢が生まれる玖珠

童話祭の反省会で、次のような申し合わせがありました。

- ① 童話祭は今後毎年おこない、最大の年中行事とする。
- ② 会期は、五月五日から三日間とする。
- ③ 基本的には、「こどものために」「こどもを主体とした」「こどもを楽しませる」行事にする。
- ④ 名実ともに全国的な大祭典にまで発展させる。
- ⑤ 三島遊園地を常時子どもたちのための施設にするとともに年中美化に努め観光価値を高めること。

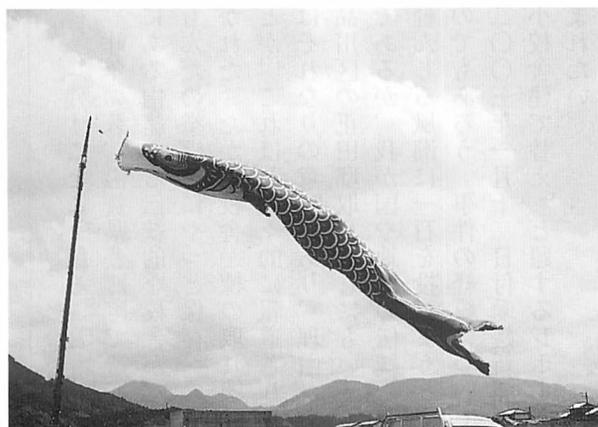
夢を膨らませよう

この申し合わせにより、第二回より「日本童話祭」と銘打って玖珠町全体に広がり最大行事となって発展してきました。

昭和四十年代の初頭から日本童話祭に町民の参加が一層目立つようになり、そ

れにつけて「子ども主体の内容に・・・」を取り入れ町内外からの子どもの参加も多くなりました。又、新しい町づくりとして「日本童話祭という子どもを主人公にした、祭りに結集する町民のエネルギーをまちづくりのエネルギーに転化し、他の市町村に類をみないまちづくりをしよう」と町民に『童話の里づくり』を呼びかけました。

童話の里づくりが町民に認識され、久留島武彦翁の遺志を継ぐため多くの文化サークルがつくられ、それが結集してわらべサークル協議会として祭りを盛り上



ジャンボこいのぼり 全長30m

げるようになりました。一方、町内の有志による祭りのシンボル・町のシンボルとして、全長六十メートル、最大胴回り二十四メートル、口回り十四メートル、目の直径四メートル、重さ二百キロの「ジャンボこいのぼり」が祭りの日に悠然と空高く泳がせ一層人気を集めました。

その後第二号、第三号と増え、現在第四号、第五号、第六号が五月五日の童話祭に姿を見せ、空高く泳いだり、こいのぼりの腹の中を多くの子どもが歩いたりしています。このように町民自身が主体となって町づくり運動を広げ祭りを盛り上げてきています。

子どもと夢を…（これからの祭り）

これまで日本童話祭は、多くの子どもたちに『夢』と『希望』を与えてきましたが、第五十回日本童話祭を節目に、今までは『子どもに夢を』をメインテーマに子どもを主人公に据えながら大人が祭りを進めて来ました。これから「日本童話祭」は子どもの心を持ち続ける大人たちが、子どもたちと一緒につくりあげる祭りで、大人から子どもへの文化の伝承の場として、子ども自身が本来持っている遊びの文化の発見の場として、『子どもと夢を』をメインテーマに子どもと大

人が一体となって「町民総参加」で「参加して楽しい」日本童話祭を目指していきます。

現在、第五十五回（平成十六年）日本童話祭の節目を用途に、硬直化した組織・マンネリ化した行事の見直しを進めているところです。久留島武彦翁の精神を継承するためソフト面（童話等おとぎ劇場）の充実と子ども主人公の祭りづくりに精進しているところです。



日本童謡祭（人形劇）

引き算型まちづくりの事始め (七)

「残すことこそ創ること」

昨年の暮、滋賀県豊郷町で豊郷小学校にある由緒ある伝統的な校舎が、すったもんだの挙げ句にやっと保存への道が開かれた。たかが校舎一棟の取り壊しのことが、これほど大々的に報道されるのはそれなりの意味があり、理由がある。品川区の正田邸取り壊しにもいえることであるが、我が国や地域の伝統や歴史を軽んじる風潮に一石を投じようとするものでもあろう。事件の経緯については、二〇〇三年一月十二日付愛媛新聞「豊郷小校舎建て替え」と題するレポートを読みたい。

「歴史的環境、歴史的物件を残す」ということは重く、責任のあることである。「残る」という消極的な結果論として考えるのではない。残すということは、町や地域が持つべきアイデンティティとして自覚することから始まる。経済成長の時期でみれば残したい側が悪者で、壊し、撤去し、あたらしいものをつくる人たちが善者である。この善者が徒党を組み、多数決民主主義という武器を持てば、これに勝る戦術はなく、残すことに意義を見出す有識者には太刀打ちできない。

ことに戦前の大正ロマンを彷彿させるような学校校舎、図書館、駅舎、警察署、

役場庁舎など、公共施設の場合であれば、「危険」「不便・不十分」「耐久性」、さらには「みすぼらしさ」までが手伝って疑問視せられ、スクラップ化されていく。むしろこうしたモノが存在することが、町としての非近代化的で、かつ田舎臭くて、近隣の町と比べて恥ずかしいこととした意識を持つ人には、容易に説明する言葉は持ち合わせていない。

このことに反して「残す」とは、使い切る、使いこなす、自慢や誇りに感じるなど、近隣との差別化による有用性が発揮されることである。この辺りの価値観や、保存へのノウハウの有無が足がかりにもなってくる。そしてこれら保存へのプロセスとメカニズムの中にこそ、引き算型まちづくりの真髄が秘められている。

豊郷町では今、「行政にまちづくりを任せておいては大変だ」と、町民の校舎保存へ向け、熱い思いに駆られた行動が始まった。そのエネルギーの発露に経緯を表したい。そして部外者とはいえ、歴史的な建造物の保全に関心を寄せる一人として安堵した。その後の報道に関する関心を寄せていると、事態の真相は、校舎の保存から首長の解職請求へと発展し、豊郷町のまちづくりの根幹をなす体制づくりへとことが進んでいる。自分たちが

住んでいる町のことに関して、これまで参加の場がなかったのかも知れないし、そのことからの不満が蓄積されたことでもあろうが、これ以上「任してばかりではいけない」「主役は俺たちだぞ」といった自覚が芽生えた証かも知れない。

これまでもこのシリーズで触れてきたように、本来自治とは、住民の側から見る限り任すべきことではなく、住民自らから参画すべきものであり、参画を通して利益と負担を共有することにある。にもかかわらず選挙を通して、首長と議員を選任することで、いつの間にか政治を任し、任される体質が生まれたといってもおかしくない。さらには選挙区にかかる利益誘導型の選挙ともなれば、公約という名のモノづくり行政が横行してもおかしくない。むしろモノが造られるほど「やり手」としての評価が高く、これらを背景にして今回の事件が生じたとするのは間違いであろうか。

これらの長い慣行は、有権者をして当然のように「行政サービスを与えられる側」に位置づけてしまったことからはじまっている。そして、首長、職員は「与える側」の立場であり、上位に位置づけられる一方で「お上」になりきれぬのかも知れない。お上だから少々の瑕疵は許される、咎められない、表沙汰にはされ

ないといった、保身や組織を守ることに価値観を見出してしまった姿が今回の事件の中に読みとれる。そして本来であれば被害者の立場に立つべき有権者が、様々な行政活動に対する評論家になってしまふことで済ませてきた責任も小さくはない。

テレビ報道に言葉として出た町長のコメントの中には、壊すことで議決を経てから肅々と壊すばかり・と、あたかも議会に対しての約束事として校舍を取り壊すことが町長の責務であるかのような言葉が続いていた。時代としては珍しくもない話ではあるが、どうも「行政対住民」として敵対視するこの姿がここにも見え隠れする。

実はこんな話しは全国至る所で展開され、惜しまれて無くなってしまった建物は五万とあろう。滋賀県のことばかりを笑ってはいられない。かつて内子町だった、コンクリートの校舎が欲しいために、残すべき小学校校舎を、危険校舎という汚名の下であっけなく壊してしまった。学校現場も、行政組織の関係者も壊したい人たちが集合されているのであるから、使いこなすための整備の研究や、歴史的文化的価値を追究する研究などは棚上げされてしまった。すでに三十年近くも昔のことだから、保存しようと言う声すら

上がらなかつたが、今でも、内子町の巷では「残しておけばよかつたなあ。」というノスタルジックな声は上がる。

引き算型まちづくりとしての課題を検証しようとするれば、いつも住民と行政の関わり方、職員と行政組織のあり方に集約されるが、ここにも似たような事例が生じた。

テレビ番組に水戸黄門という根強い人気番組の存在は承知と思うが、あのドラマに出てくる悪代官とそれに纏わる役人の姿を、日々の行政組織と活動に置き換えて考えてみると分かり易い。例えば悪代官が町長であるとすれば、町長の指揮の下で、ときには住民の不利益を承知しながら、公務と称して町民に強要する役を演ずる役人は役場職員になってしまふ。校舎を保存したいと願う住民を敵に回し、職員としては業務命令という名の本務を処理しなければならぬ立場は複雑この上ない。正しいことを正しくやれば矛盾が生じるのは当然のことである。

昨年マスコミを賑わした外務省はじめ大手企業の不正スキャンダルが、内部告発によって部分的にせよ浄化されたことは記憶に新しいところであるが、ここでも告発した者が多大の犠牲を強いられている。正直者が疎んじられる社会は、何も民間のことばかりではない。

行政組織に身を置く公務員諸君は、本来住民に代わり、全体への奉仕者として行政事務に従事することが本務であつて、選挙で選ばれた首長の僕ではないはずである。真に民主的なまちづくりをしようとするれば、行政が抱える今回のような矛盾に対して、積極的に行動する勇気を養わなければならないだろう。住民のために汗を掻く。住民のために首長の意志にそぐわない行動を余儀なくされる。管理者はこれらを業務命令違反として脅し、さらには処分まで執行しようとする。

読者の皆さん、まちに関心を持っている町民の密かな願いは、役場の中に話を聞いてくれる人(職員)、一緒に行動をしてくれる人(職員)の存在を願っていることを知って欲しい。役場は、住民運動の事務局であれとは、多くのまちづくり事例の中に実証されてきた言葉である。昔柳川市で堀が復活したときの経過には、堀を埋めて道路にしようとする計画決定をし、関連した議案が議決された案件を撤回させてまで、市民の立場で掘り割りの再生に汗した広松係長の勇気と実践を学びたいものである。

環境と共生する時代だからこそ、「残す」こと、「使いこなす」ことの大切さを知り、行動してはいかげしょう。

遊子学 ー東京からの思いー

藤田 圭子



あなたの故郷はどこなところ？うちの故郷はね、遊子ってところなんよ。うち自分の故郷・遊子が大好き！なんでかって？うーん何でやろう・・・全部かな。答えになつてないかもしれないけど、自分が生まれ育ったところを一番好きって思うんは当然のことやと思ひよる。だって、知らないところを好きだとは言えんやろ？

遊子ってね、宇和島市なんやけんけど、独立した一つの文化圏やと思ひよるんよ。昔は本場に独立した一つの村やつたけんかね。昔から漁業の盛んなところでもあり、山では段々畑が空までと続いているところでもあるんよ。昔は宇和島市近辺の山全てが段々畑やつたけんけど、今ではまばらにしか残つたらんのよ。それでも、遊子の水荷浦には集中的に残つとるんよね。うちはその山の下で育つたんよ。段々畑

は物心付いた時には、まだけつこう残つとつて、当然のようにそこにあつたものやつた。それが、徐々に草木の生い茂るようになり、段々畑の姿も消えていった。

段々畑は当然のものやつたんやけど、ある日を境に当然のものでなく、特別な存在へと変わつてい

つた。学校の帰りに、ふと空を見上げると

段々畑は、星が瞬く

夜空に吸い込まれて

いくようだった。こ

んなに綺麗なもんが

あつたんや！つて気

付いた瞬間だった。

「耕して天に至る」

つて言葉は本物やっ

たんやね。それから、

段々畑は私にとつて

大好きな場所になつた。他の段畑と同じように無くなつてしまふんだらうか・・・寂しい思いを抱きながら、カメラを持つて段畑に上る日が多くなつた。

そんな遊子再発見があつた日から、遊子に人がおるようになるんはどうしたらええんやろう？つて漠然とやけど、考えるようになっていったんよ。大学に通うために、東京で生活して一年が経つたんやけど、地方と中央の差つてなんやろう？遊子で暮らすにはどうしたら良いんやろう？つて思ひよつた。地方に対して中央、田舎に対して都会つて考え方があるよね？その関係には地方へ中央、田舎



「都会っていうんがあると思わん？うちもけっこう、そんな考えを持つとった時期があった。でもね、段畑とか遊子での生活とかがうちにとってガイニ居心地良いことに気付いてからは、そんな考え方、おかしいんやないやろうか？って思うようになったよ。」

去年の今ごろ東京に行くうちに向けられる言葉は「東京に行けて良いね」、夏に帰ったときに言われたんは、「戻ってきてても、つまらんやろうか？」「東京はええやろうが」「就職するんは東京でしたらええわい」っていうんが多かった。こんな言葉に対してうちは何で自分らが住んどることをそがいに言うんやろうか



って悲しかった。実際、遊子、愛媛に帰っても出来る仕事は限られとるかもしれんけど、でも遊子でだつて、愛媛でだつて出来る仕事はあるやん。なんで、東京やないといけんのかね・・・皆が皆、東京に集らんでもいいやん。確かに東京には、遊子では得られないもんもたくさんあるよ！でも、遊子にだつて、東京では得られんもんもたくさんあると思う！日本は東京だけのもんやないし、全国津々浦々すべてが一地域っていう考え方で良いやんね。今は、東京からの情報発信が主なものになつとるやろ？でも、こんだけインターネットとかが普及しとる今やたら遊子からでも出来るんやな

い？うちだつて、今『遊子っ子広場』ってホームページを作つとるんやけん、これだつてどこからでも見ることは出来るよ。現にいるんなどころから見とくれよ。ホームページを作つたんは、遊子とか地域について考えたり話し合つたりする場所が欲しかつたけん。遊子について、今まで残つていたもんが失われるんが寂しいけん、亥の子唄とか、お手玉唄とか、民話とかね。

遊子だけやのうて、あなたの故郷だつて、同じや。故郷についてちよつと一緒に考えてみんかな？あなたの故郷にも良いところはいっぱいあるんで。将来、その故郷が自分の活動する場になつてもええやん。たぶん人の少ないところでも集めとか町興しとかするんは、ちよつとした繁華なところするんよりも難しいけん、でも難しいだけに成功したら倍も何十倍も嬉しいや！それに、人に感謝されるんにしても、自分の故郷でしたら、一緒に喜べる人は相当多いんやない？ほら、一緒に頑張ろうや！今でも、明日でも良いけん一緒に話そう！うちはいつでも『遊子っ子広場』であなたが来るんを待つとるけんね！



②

“MY TOWN” “らおっちゃんく”

歩キ目デス & 足ラテス

第23弾

近代化遺産シリーズ

愛媛は優れた近代橋梁の宝庫 「コンクリート・アーチ橋」



岡崎 直司

このシリーズでは、何回か「近代化遺産」についての稿を掲載したが、一昨年来から県によって進められていた「愛媛の近代化遺産調査」によって、次第にその全貌が明らかになるうとしている。それらの中では、予期せぬ様々な発見があり、また特徴も浮かびあがってきた。明治から昭和二十年までの近代において、分野は多岐にわたり、概略は土木・産業・建築・戦時遺産の四分類となるが、今回は、土木遺産の中から「橋」について迫ってみよう。

A. 下路式アーチ橋について

八幡浜にある明治橋（写真①）を紹介しよう。昭和五年三月の完成。こうした形のを下路式アーチという。つまり、道路面がアーチの下辺にあるもの。

しかし実はこのタイプ、目下、全国で激減中なのだという。そう言われれば、身のまわりでなかなかお目にかかるシロモノでもない。現に愛媛県下でも、もうここだけになってしまった。しかも、今回の調査で判明したのだが、現役の道路橋として、コンクリート造の下路式アーチ橋としては、ナント全国で最古のものだと折り紙がついた。

思えば、誕生後すでに七十三歳、人間

なら古希を過ぎ老境の域である。ここまですく頑張った。港町である八幡浜の新しい川に架かるが、河口から六橋目にあり、塩害を受けにくかったことと、何より行政側の手厚い看護と。何度も補修が繰り返され、大切に使われてきた結果でもある。こうした行いは、地味ではあるが、スクラップ&ビルドの高度経済成長期を経てここに至っていることを考えると、特筆して評価に値する。

B. 上路式アーチ橋について

一方、下路式に対して、逆にアーチの上の路面があるのを上路式という。コンクリート橋としては、県下で十一橋が確認され、またそれらは、アーチ壁面の状況によって開腹式と充腹式に分類される。こうしたデザイン的にも優れた美しいアーチ橋が、一県で多く存在しているのも、実は全国的には珍しいことであるらしい。当時の県の技師か何か、特定的人物が背景にいた可能性も類推されている。美川村に有枝橋（写真②）という橋がある。久万川沿いに南下する現在の国道R33号線で、落合を過ぎてしばらく、左側に目をやると、久万川の支流である有枝川を一またぎした優美な姿が見受けられる。それが有枝橋である。大正十一年

の竣工は、コンクリート・アーチ橋の県下最古でもある。

路面と大アーチとを支える支柱の形が、それぞれ小アーチを連ねて美しいが、こうした大アーチの壁面が壁体でなく空間になっているものを開腹式といい、県下に5橋しかない。ほか、大宮橋（西条市・S2）、舟戸川橋（第十二弾参照、野村町・S5）、宿野々橋（松山市・S5）、落合橋（玉川町・S12）である。これらの造形は、すべて型枠にコンクリートを流し込み固められるので、つまりは型枠大工の腕による。そうした職人芸も見どころである。

その意味では、こうした山間部に、当時まだ珍しかったコンクリート造の橋が建設されたわけは、それぞれの県都である松山と高知を結ぶ幹線道整備として意が注がれたのと、当時、徐々に普及しつつあったバス路線としての道路拡幅である。明治末期に県下に登場した乗り合いバスは、次第に地域の交通事情を一辺させてゆく。この頃には、県下各地にバス会社が乱立し、当地では、久万に本社のある中予自動車



や面河自動車などが走っていた。ウン、確かにボンネットバスとこの橋は似合いそう。

因みに、そこからもう少し国道を下ったところにある橋（写真③）の方も紹介しておこう。

こちらは有枝橋と同時期に架けられたが、開腹ではなく、充腹式のアーチ橋。



写真のように、コンクリート壁体が久万川をまたいでいる。この種は、県下に六橋確認された。三和橋（川内町・T11）、とまかわ 柳川橋（面河村・T14）、河口橋（西条市・T14）、志川橋（丹原町・S6）、そして別子鉱山鉄道の桧尾川橋梁（新居浜市・S6）である。

以上、コンクリート・アーチ橋の概略を巡ってみたが、詳しくは、四月末には発売となる「明治・大正・昭和の建造物・・・愛媛温故紀行」えひめ地域政策研究センター発行、をご覧ください。 (29P参照)

ひめ 媛のかわら版



キャンペーンおばさん！

(その3)

松野町 隅田 深雪

滑床溪谷もすっかり春景色、桜がこれぞとばかりに咲き競っています。

森の国ホテルのゆうげにも山菜がのぼるようになりました。山好きのスタッフは山菜採りにいそいそとしています。暖炉の火もそろそろ最後になろうとしています。

春のもう一つの顔は、異動の季節です。異動発表、退職の連絡、折角次のステップに入ろうかなと思つた矢先に、担当者は変わってしまいます。皆様引継ぎを宜しく願います。又最初からは大切な時間の無駄づかいとなってしまいます。

今年も早三ヶ月が過ぎましたが、キャンペーンおばさんはお正月の餅つきに始まり、大阪キャンペーンと今年も全開です。しかし世の中甘くなく、「年を考えなさい」ということか？流行の最先端「インフルエンザ」の洗礼！インフルエンザなるものは生まれて一年で初めて、風邪はいつ引いたか記憶も定かでないくらい、一度寝込んだら我が身の弱さに涙もほろり！布団と仲良しの五日間でした。

大阪キャンペーンは江戸堀に移転した愛媛県大阪事務所で開催、ビジネス街での開催に集客は？しかし都市で生活している人々も地元派は少数で、出身は四国、転勤族多数、親は四国出身、子供が転勤

で四国とか、四国に関わる方が結構いるんだなーが感想。ふるさととは懐かしく、一度暮らしたところは愛着があり、「帰りたいなー、行ってみたいなー」と嬉しい言葉も沢山いただきました。自然豊かな四国だからこ言ってもらおう言葉でしょうか？「あなたのふるさと四国」そんなキーワードも浮かびました。

いつものことながら、他地域の方からみれば「四国はひとつ」です。四国、松山、足摺、金毘羅等に行きたいという人はありますが、県名を言う人は少数派です。「四国州」の構想もあるようですが、お客様の方が行政より一足先に「四国はひとつ」を実践しています。私たち観光現場も提言に終わらないように、実践主義で頑張らねばと決意。

もうひとつ大阪で感じたことは、都市での移動はやはり疲れるなー！空港、バス、地下鉄と、荷物を両手に歩くこと、歩くこと、元気な者は体力・運動不足を痛切に感じます。しかしお年寄りの方や、体の弱い方はどうするのか？社会資本整備でのグローバルデザインは緊急課題です。暮らしに関わる様々な整備について、国を始め担当機関、学識経験者の方々の検討会議は各方面で沢山開催されていますが、縦割り行政の感否めず、一般住

民の方々、若いお母さん、子供たち、大学生等、各世代の人たちが身近に感じられる集まり、勉強会の開催を皆で働きかけていきましょう。

先日の田舎道での体験談です。車で走行中道路に人が倒れています。前日に受けた救急救命の講習が即座に頭に浮かびました。おばあちゃんがお向けに倒れており、声をかけると「足が痛くて起きれない」の返事。救急車を呼ぼうかとおろおろしていると、知り合いの方が通り掛り二人でやっと起こしたところ、原因は背中荷物が重くてバランスを崩してひっくり返ったとの事、家まで送って事なきを得ました。このおばあちゃんは一入暮らして心臓も悪く、久しぶりに生活用品を買い物に来て、たくさん荷物を背負っていたのです。バスは二時間に一本、歩くしか手段がなかったのです。皆で目指す「元気な高齢化社会」、ここで住んでよかったねと思えるサポート制度等、暮らしのグローバルデザインも皆で実践したいですね。

ある日のお客様との会話です。そのお客様は少し足が不自由になられて車椅子をお使いのお母様と一緒にホテルに来ていただくリピーターの方です。森の国ホテルの客室は二階、エレベーターはあり

ません。一階はスロープ、車椅子用のトイレはありますが、バリアフリーとは言えない状況です。お帰りの時に「いつもご不自由をお掛けしまして、申し訳ありません」と言いましたところ、「いいえ、いつもスタッフの方にはやさしくしていただきますし、母も滑床に来るのを楽しみにしています。できるだけ一緒に外に出たいと思っていますし、母も少しの階段でしたらがんばって自分の足で降りてみたいようです。ハードのバリアフリーも大切ですが、皆様の気持ちの方がわたしにとっては嬉しいのです。具合が悪くても出来るだけ自立した生活をしたいと思います」との返事。私にとっては初めての経験でした。次にこんなお話もされました。「確かにいろいろな状況の方々がいらつしゃいますから、バリアフリーも大切なことですし、まだまだ足りないところが多いですが、余りにも用意をしようとする気持ちは弱くしてしまうのではないのでしょうか。それは今の子供たちにも言えますね」。とても考えさせられるお話でした。私自身もまだ結論の出せない事です。いろいろの機会にこの話をしまして、皆様のご意見をお聞きしているとこです。

でもこんな素敵なお客様に逢うことの

できる「森の国ホテル」をますます好きになりました。キャンペーンおばさんは、少し肩の力を抜いて今年もがんばります。桜が散り、薄ピンクの山桜が咲き、滑床の山は一年で一番元気な新緑の季節を迎えます。皆様も自然の息吹を感じ、是非とも滑床にお越しくださいませ。

春の滑床 風便り



ホテルオリジナル ピーチワイン



平成14年度 地域づくりリーダー育成研修会

じゃこてんの会活動報告



昨年度も県からの委託で、愛媛大学の讃岐幸治教授を塾長に迎えて「地域づくりリーダー育成研修会」を実施した。東は伊予三島市から南は城辺町まで県内各地から、環境や地域福祉、映画誘致などいろいろな活動をされている十八名の方々が参加して、一泊二日の現地研修をメインにした計五回の研修を行った。

最初の顔合わせとなった開講式は七月六日に行われ、参加者それぞれから自己紹介、研修会への抱負などの発表があり、研修会がスタートした。

宇和町研修
八月三十一日、九月一日

「古代ロマンの里」宇和町石城地区にある「西南四国で唯一の前方後円墳」である笠置峠古墳を視察した。実際古墳にはビニールシートがかけられ全体を見ることはできなかったが、途中の道筋は宇和と八幡浜を結ぶ旧街道で、お茶屋跡やお遍路さんのお墓などが残っていて、雨に濡れながら、たまに滑りながら、石城地区の歴史文化を肌で感じることができた。

愛媛大学の下條信行教授から「文化遺産・自然遺産の保存・活用を通じたまちづくり」をテーマにした講演があり、古墳一つだけを見るのではなく、他の古墳や周りの地域環境もネットワークして地域づくりをしていくことが大事だと言われた。また地元の「笠置文化保存会」「中町を守る会」の活動について、それぞれの思い、苦労話等をお話いただき、地域の歴史・文化をより理解するために、地域にある資源を一つ一つつなげていくことの大切さを学んだ。

翌日も雨の中で中町の町並みを見学し、



雨の中西南四国で唯一の前方後円墳 宇和町「笠置峠古墳」にて研修

開明学校で模擬授業を受けたり、民話でされている研修生のグループの方たちから民話を聞かせていただいた。

県外研修 徳島県上勝町・阿波町

十月十九～二十日

上勝町は、問題解決能力を持った人づくりを目標として、町内を五地区に分けて1Q運動会を開催したり、ゴミを一つ所に集めて三十五品目の分別を行っている。

上勝町と言えば「彩(いろいろ)り」産業。高齢者が中心に、どこにでもある葉っぱや小枝、花などを料亭用に直販や市場出荷し、二億円を越す産業に成長している。生産販売の管理を高齢者自身が確認しながら行っている「彩情報システム」につ

いて、上勝町産業情報センター(株)いろいろの横石専務からお話を伺った。この情報システムでは、端末のボタンをポンと押すだけで即座にその日の自分の生産販売状況が分かる。高齢者にとっては、これを見るのが何をするよりも一番の楽しみになっている。これからのリーダーは、地域の中で住民が一番楽しみなながらできることをつくりたいといけないなどの話があった。

彩栽培の畑や会員の出荷方法、独自で開発した簡易な端末なども見せていただき、「葉っぱが産業になるんだ」と研修生のみなさんも衝撃を受けていた。

翌日は阿波町の井原まゆみさんを訪ね、阿波町の環境への取り組みについてお話を伺った。

「バーベナ・テネラ」を育て町内の至るところに花街道や花公園をつくった花いっぱい運動や、町内の環境グループが連携してゴミの現状調査や減量推進、環境教育などを行い、さらに環境にやさしいものを購入する「グリーン購入」運動にも積極的に取り組んでいるという話に、阿波町民の「まちを良くしていこう」という意識の高さを感じた。

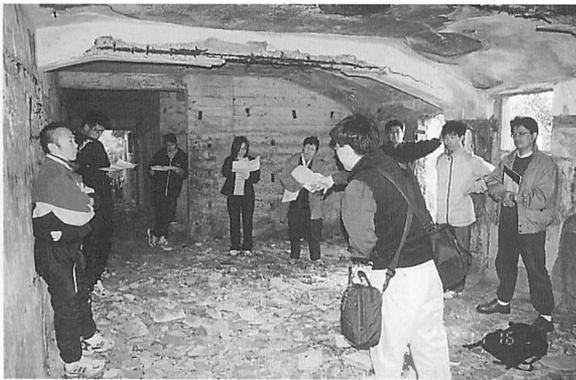
内海村研修 十一月十六～十七日

旧日本軍の通信施設であった近代化遺

産「由良砲台」を視察。由良半島の先端にあるので、渡船で移動。当日は波が高く、波しぶきをたくさん浴びながら、安全な岩場には下りられず高い岩をよじ登って砲台へ。スリリングではあったが、普段の生活では味わえない新鮮な体験をした。

昔のへんろ道が保存されている「柏坂へんろ道」、三六五日二十四時間開放されている村の交流施設「DE・あ・い21」についてのお話があり、内海村の「もてなしの心」「大らかさ」を実感。

翌日は、松山市社会福祉協議会の白方雅博氏が「おもしろいまちづくりバウムクーヘンの作り方」と題して講演。地域



近代化遺産 内海村「由良砲台」を視察

の社会資源を、人材、団体、拠点・施設の仕組み・行事の四つの分野に分けて整理しておけば、地域の問題解決のきっかけになるという話をしていただき、とても分かりやすく取り組みやすい方法だと感じた。

閉講式 二月二十八日

双海町地域振興課の若松課長にこれからの地域づくりリーダーに期待することについてお話いただいた後、「子どもたちと地域づくり」、「地域の産業おこし」のテーマに分かれて討論した。

研修生の感想としては、「実際に地域に入って見るこの大切さを実感」、「自分の地域の独自性を見つめ直すきっかけになった」、「自分自身が輝くことがまちづくりなんだ」などがあった。また、「一回ごとその場で研修についての検証ができれば」、「年間を通したテーマの追求を」との意見もあり、これからの研修に活かしたいと思う。

一年間事務局として、と言うよりも同じ研修生として、いろいろと勉強させていただきました。研修でお世話いただきました方々にお礼申し上げますとともに、これからの研修生のみなさんの活躍をお祈りいたします。

九州のまちを訪ねて

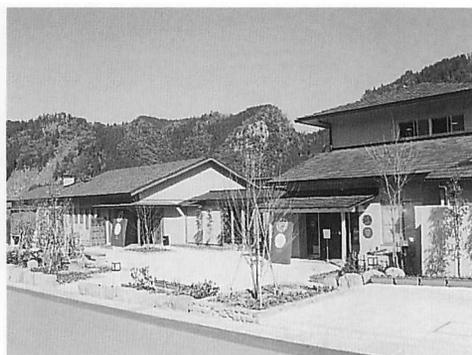
研究員 奥山 清司

二月中旬、センターの研修事業で、大分県の大山町・玖珠町へ訪れる機会があった。

◇大山町

大山町は、九州の真ん中、山の中にあり、「一村一品運動」の発祥の地として既に有名な町である。「梅栗植えてハワイへ行こう」のもと、昭和三十六年に始まった村おこし運動(第1次NPC運動)は、従来の耕種農業から水田に梅を、畑に栗を植え所得の向上を図ろうという農業改革運動をしてきた。九州における梅の一大産地に成長し、昭和四十二年からは毎年町民がハワイに出かけるようになった。その後「人づくり」をテーマとした第二次NPC運動、さらに「理想の農村社会づくり」をテーマとした第三次NPC運動が進められている。

今回は、はじめに観光施設「豊後・大山 ひびきの郷」にお邪魔した。ここは平成十四年十一月にオープンしたところ



ひびきの郷

で、宿泊・レストラン・温泉・体験工房・リキユール工房といった施設がある。管理・運営は第三セクター「株おおやま夢工房」がしている。

ひびきの郷でのお話

この研修室をお借りして、支配人である緒方さんに、大山の地、ひびきの郷の施設について、また農業公社の河津さんに、大山の農業の全般について話を聞いて頂いた。

(内容一部紹介)

大山の特徴としては、一つめに福岡市に「おおやま生活領事館イン福岡」という出先を持つていること。二つめに住民の方に町のことをより理解してもらえようように広報紙だけではなくテレビでも見られるようCATV「大山町有線テレビ(OYT)」を設置していること。三つめに大山直営の木の花ガールデン、(アンテナ

ショップ、リサーチショップ、直販ショップ)が大分に二店舗、福岡に二店舗、大山町に一店舗、計五店舗あることなどが挙げられる。

また福岡が水不足ということで水源を大山町に今建設している。この水をうまく地域づくりにつなげようがんばっているところである。

農業は、大山町に限らず日本全体に言えることだが、最近、外国で作られた農作物が、日本で作られた農作物よりもどんどん安くなってきていることから、農業生産が停滞している状況である。若者も都会へどんどん流れ、高齢化になり労働力不足にも陥っている。

へき地の山村でやっていくためには、大山には大山にあった農業をしていかななくてはならない。高齢者が剪定バサミと



ひびきの郷研修室にて
緒方支配人のお話

剪定袋があればできる農業を目指してやって来た。大山町は一農家の耕地面積が狭いことから少量多品目栽培の方法で、梅、栗、すもも、ハーブ、クレソン、なめこ、えのきたけ、しいたけなどを栽培しており、その品種は百二十種類にも及んでいる。特に梅はさまざまに加工して付加価値を高めていくなど梅にこだわった取り組みが行われている。

これからは、地産地消や観光といった交流による異文化の受け入れだとか、新たなネットワークの構築が必要で、物を作って売るだけではなく、もう少し、消費の場だとか、ここで作ったものをここで販売する、ここに人を集めるといったシステムというものをもっとつくるべきだろう。

そこで、作られたのが大山ひびきの郷である。計画に当たっては、議員も含めたスタッフで毎月ワークショップをし、またそこで決まったことを新聞でとりあげ、各世帯に全部配ったり、テレビ等でも取り上げて、住民の人にも理解してもらえるようにした。

ここで紹介したのは、ほんの一部の内容でみなさんに全部紹介できないのは残念である。

自身で一番印象に残ったこととはという

と緒方さんが言ったこんなセリフである。

「地域活性化に携わる中で、何々しいという世界の人達ってというのは、まず行動しないだろうと思う。何々しなければならぬ世界みたいな所に移行させてくれたことが、自分を動かした。」

なるほど、確かにその通りだなあと感じる一言だった。同時に、そういう時に大きなカギを握るのは情報であり、情報を征服する能力が重要になってくるということも教わった。

木の花ガルドン

ここにある多様な農産物は、農協による一元的な集出荷体制を整えている。朝早くから家庭菜園で収穫した農産物が並んでいる。店頭に並ぶ農産物は、各家庭で栽培、収穫された新鮮で安全な農産品を持ち寄っている。形は不揃いで見かけの悪いものもあるが、ほんとうの野菜は形ではなく、新鮮で安全な美味しいことが基本と考えている。オーガニック農園は、地場で収穫された安全で健康な農産物を使った食の提案をしており、そこのバイキング料理は食べ放題で、参加者にも好評だった。

◇ 玖珠町

今回、「キラリ光るまち」でも紹介さ

れている町である。

森町散策

豊後森藩久留島氏の歴代住居地であった三島公園一帯、毎年五月五日に開催される日本童話祭のメイン会場、昔ながらの城下町の面影が残っている森町を地元ボランティアガイドさんの説明を聞きながら散策を行った。途中「日本のアンデルセン」とたとえられ、生涯を「こどもに夢を」と、童話を語りつづけ、日本中のこどもたちに慕われ親しまれた久留島武彦先生の記念館にも立ち寄った。



森町散策

わらべの館

地元、役場の方、童話サークルの方に玖珠町の概要、童話の里のまちづくりについて説明があった。

わらべの館の正面には、久留島武彦先生の口演童話五十年の歩みを記念して、昭和二十五年に世界一の童話碑が建設さ



わらべの館にて

れた。以来毎年五月五日に全町民をあげての日本童話祭が盛大に開催されている。「祭りから町づくり」をテーマに童話の里づくり運動に発展し、時代を担うこともたちが国際感覚を身につけ、平和で教養豊かに成長するようにと願いを込めて、昭和五十九年度に建設されたのが「わらべの館」である。

童話の里のまちづくりは地元のみならずサークル協議会が中心となつて、主にも子どもたちを対象に、語りべや、人形劇、影絵、紙芝居、音楽会など、二十三の団体がいろんな活動を展開してわらべの館をささえている。今回、愛媛から民話の会の人々が参加していることもあって、わらべの館で民話を発表するなどの交流もできた。

豊後森駅機関庫

地元機関庫保存委員会の方による説明

があった。

豊後森駅は現存する扇形機関庫としては、京都市の梅小路機関車館と並び規模は日本一で、転車台も残っている。米軍の攻撃も受け、戦争体験した貴重な歴史的機関庫であり、大分・鳥栖の中継ポイントとして、また宮原線も含めて鉄道の歴史上、重要な位置にあり、玖珠・九重両町にとって、戦前戦後を通じ、経済を支えてくれた地域のシンボルでもある。全国から機関庫を見学に来る人が後を絶たず、写真家や画家の作品、テレビなどで度々紹介され、沢山の人が魅力を感じる、芸術的建造物としての機関庫でもある。

このことは文化遺産としての資質を十



豊後森駅機関庫跡

分にそなえ、日本の貴重な鉄道建造物としても大きな財産となり得る。しかし、現在はJR九州が所有している状態であり、壊すのに何千万円もかかるというところから、そのままの状態で放置されている。保存委員会の方は、文化財として残したいということから、一万人の署名運動を実施し、玖珠町の方に保存のお願いをしようとしたところ、結果的には二万三千人の署名を頂くことができた。またこれを機会に「機関庫物語」というショートムービーも制作するなど、保存運動にも取り組んでいる。

* * * * *

今回、一番印象に残ったことは、大山町での緒方さんのお話。

地域での地理的条件から何をしていくべきか、まずは地域のデータ情報を把握することが大事だとわかった。それを今度は住民の人たちに意識してもらって、一人でも多くの人達が、まちづくりが、人々の生活、豊かさにつながるということを意識してもらうことが大事なことだと感じた。また、情報を得るだけでなく、それをどのように加工していくかが大事だとも感じた。

あなたたちのまちづくり活動をアシストします

「まちづくり活動アシスト事業」申し込み受付中

自分達が活動している中で、実践者から話を聞きたい
集会やシンポジウムを開催したい

けど、ノウハウや資金がなくて…と悩んでおられるあなた！

まちづくり活動アシスト事業 があります

一度センターにお問い合わせください。

問い合わせ・申し込み先

財団法人えひめ地域政策研究センター

〒790-0003 松山市三番町四丁目10-1 愛媛県三番町ビル2階

TEL 089-932-7750 FAX 089-932-7760

E-mail info@ecpr.or.jp

BOOK INFORMATION

●松山 地名・町名の秘密

アトラス出版 933円(税別)

私たちにとても身近な存在でありながら、その由来が歴史に彩られたものだという事は意外と知られていない地名・町名。今、「平成の大合併」が進められる中、市町村の名称や地名の行方が取りざたされていますが、地名・町名は長い歴史を経て形作られた無形の財産であり、地域の歴史の中で起こったさまざまな事柄が、その中に閉じ込められています。

松山を中心とした地名・町名の起源やエピソードに、伝説や人物、歴史との関係を絡めて楽しく解説された本書は、見開きページで項目ごとにコンパクトかつ丹念に検証されており、面白くて、ためになる地名・町名の基礎知識が満載です。



●明治・大正・昭和の建造物「愛媛温故紀行」

いよいよ出版近し！

アトラス出版 A4版 220ページ 総カラー 2,500円(税別)

平成13年から、県民交流課の事業として、県下70市町村に対して「近代化遺産総合調査」を行い、その総まとめがこのほど出版されます。

内容は、リスト化された約1300件の近代化遺産の中で約300件をセレクトし、写真と文章でビジュアルに編集したもの。それぞれ、土木遺産、産業遺産、建築遺産(洋風建築)、その他(戦争遺跡及び工作物)の4分類にデータを整理し、所在地マップを添えてガイドブックの性格も持たせています。

今回の調査では、隠れた地域資源が県内各地で数多く発見され、きっとあなたの町の魅力が新しくなること請け合いです。



「地域づくりコーディネーター育成研修会」 受講生募集

☆県下各地から地域づくりリーダー等の受講生を募り、コーディネーターとしてのスキルの向上を図るための実践的な研修を通じて、行政と住民の橋渡し役を担う人材を育成します。
☆研修生同士はもとより、講師、センター関係者等を含め、将来にわたる幅広いネットワークの構築を目指します。

■研修期間

平成15年6月から平成16年2月までの間で、年間6回程度の開講を予定しています。

■内 容

ワークショップ中心のプログラムで、現地研修を含めたより実践的な研修にする予定です。

■募集人数及び応募資格

- 15名人程度
- 地域づくり団体のリーダー等

■応募方法と締切り

- 直接または市町村、関係者を通じて、当センターまでお申し込みください。
- 5月15日（木）



—春です。出会いと別れの季節です—

平成15年度、えひめ地域政策研究センターまちづくり活動部門は、左記のスタッフで活動します（☆は新しいスタッフです）。

1年間センター研究員として勤務された池田さんは内海村役場に帰られました。これからも、客員研究員としてよろしく願いいたします。

後列左から	研究員	研究員	研究員	主任研究員
橋岡 勝一 (県農えひめ)	奥山 清司 (瀬戸町)	☆梅村 裕治 (津島町)	山下 大成 (愛媛県)	
前列左から	常務・統括部長	専務・所長	事務員	
脇 安生 (日本政策投資銀行)	☆白石 春美	☆栗林 美保		

印刷／三創印刷株式会社

発行／平成十五年四月十五日
(財)えひめ地域政策
研究センター

TEL 089 (932) 7750
FAX 089 (932) 7760
まちづくり活動部門

(財)えひめ地域政策研究センター
〒790-0003
松山市三番町四丁目十番地一
愛媛県三番町ビル二階

内容についてのご意見やまち
づくり活動のトピックなどあり
ましたら、お気軽に『舞たうん』
編集係までお寄せください。

（池田）
最初で最後の編集となりました。
一年という時間がこんなに短い
と感じたことはありませんでした。
昨年四月にセンターに異動して、
あつという間に一年が。
振り返ればたくさんの方との出
会いがあり、また辛い別れもあり
ました。役場へ帰っても折を見て
はいろいろなどころへ出かけてい
きますので見かけた際には気軽に
声をかけていただければ幸いです。
合併もいよいよ近づき、より一
層慌ただしくなりますが今一度、
自分の地域を見つめなおして継承
しなければならぬものを整理す
る必要があるように思います。